

会議報告

第2回日韓ワークショップに参加して

趙 公章*

第2回日韓ワークショップが韓国環境影響評価学会主催で、昨年11月12日に行われた。一昨年の第1回ワークショップで顔を覚えた日韓両国の参加者が、1年ぶりの再会を喜びながら近況を話し合うことも見られた。日韓ワークショップとは、両国の環境アセスメント分野での研究交流を目的に一昨年からはまったもので、韓国環境影響評価学会と日本の環境アセスメント学会が主催するものである。

開催地である済州道は、朝鮮半島から西南約85km離れた島で、人口は約55万である。東経126度 北緯33度に位置し日本の佐賀市と同じ緯度に位置する。リゾート地で開発ブームが続いているということからも日本の沖縄に類似する。実際、済州は沖縄と姉妹都市でもある。成田空港や関西空港から直行便もあり、最近では国際会議も多く開催される場所でもある。今回のワークショップは島の南側にある西帰浦 KAL ホテルで開催された。

日本からは本学会の国際交流委員会委員を中心に9名が参加した。前日が韓国学会の国内大会であったこともあり、韓国からは約70名が参加する盛況であった。11月11日が韓国国内大会、12日が日韓ワークショップ、13日はエクスカージョンという三日間の日程で行われた。

日本からの参加者は11日昼間に済州道に着いた。11日の夕食会（韓国国内大会の懇親会でもあった）、12日の昼食会に招かれ、韓国学会の役員の方々との意見交換を行った。ここでは主に今後の日韓ワークショップや国際交流の進め方などについて話し合いが行われた。

そしていよいよワークショップの本番が始まる。韓国学会の会長や開催地西帰浦市長からの歓迎挨拶に続いて、記念撮影を行った。そして本格的なワークショップが始まった。発表は一人あたり40分の発表で、質疑応答が15分であるが、それぞれ

逐語通訳が入るので実際はその半分しか使えないということから、時間的にはかなり厳しかった。

最初の発表は、東京工業大学の原科幸彦先生が日本における戦略的環境アセスメント（以下、SEA）の現状と方向性について紹介をした。日本の地方自治体におけるSEAの導入要因と阻害要因を分析した論文である。SEAについては韓国でも制度化の動きがあり大変興味深いテーマであった。

前会長である島津靖男先生は日本のアセスメントの新たな動きについての発表が行われた。前半ではアセスメントについて行政、市民、業者など各主体が誤解を招きやすいところをまとめ、環境アセスメントの本質についてわかりやすく紹介された。後半では藤前干渴、愛知万博、沖縄飛行場建設事例などアセスが機能した先進的事例を紹介した。

武蔵工業大学の田中章先生からは生態系評価手法についての紹介があった。最近、盛んに日本への導入が検討され始めているHEP手法についての紹介、また米国で公表されているHSIモデルの現状と比較しながら日本におけるHSIモデル構築の現状と課題についての報告があった。

江戸川大学の伊藤勝先生は、有害廃棄物の不法投棄物の処理・処分に関する多段階環境アセスメントについての発表があった。立地アセスメント、適地性アセスメント、事業環境アセスメントの各段階での手続きや考慮事項について、日本での事例をもとに紹介された。

韓国側からは、韓国におけるSEA制度の動向を李宗浩清州大学教授が紹介した。韓国では1977年に環境保全法に基づいてアセスメント制度を導入し、1993年にはアセスメント法を制定している。また1993年には環境政策基本法に基づいて事前環境性検討制度が導入され、行政計画及び開発計画を策定する際に予め環境大臣と協議することにな

った。これは計画段階における事前協議制度として、SEAへの第一歩とも言えるであろう。但し、住民参加手続きの確保など本来のSEAに向けての改訂の動きがあるということも報告された。

5人の発表のあと、総合討論が行われたが、残り時間が少なくなり深い議論ができなかったのは残念である。

今回の日韓ワークショップは、ワークショップだけではなく歓迎会、韓国学会の役員との交流会、懇親会、エクスカージョンを通して多くの意見交

換の機会があった。そこで韓国学会からは、日韓ワークショップに中国も加え、日中韓アセス学会の交流も始めたいという提案があった。

最近、韓国ではセマンゲン干拓事業や高速鉄道計画など環境アセスメントに関連したニュースが途切れない。環境アセスメントに対する需要と期待が高まっている。日韓ワークショップが両国の環境問題の解決に少しでも寄与できることを期待したい。

(環境アセスメント学会国際交流委員会幹事)

表1 日韓ワークショップでのテーマと発表題名

<p>第1回日韓ワークショップ</p> <p>テーマ 「韓国環境アセスメント制度の新展開」</p> <p>① 韓国環境アセスメント制度の変遷と展望 (金是憲, 韓国環境政策評価研究院)</p> <p>② 日本の環境アセスメント制度 (梶原成元, 環境省環境影響評価課)</p> <p>③ 環境管理と環境アセスメントの統合—韓国4大河川の水系計画の事例 (李宗浩, 清州大学)</p> <p>④ 環境アセスメントにおけるフォローアップの事例分析 (李春遠, 韓国学会理事)</p> <p>(2003年12月5日, 日本東京で開催)</p>
<p>第2回日韓ワークショップ</p> <p>テーマ 「戦略的環境アセスメントに向けての新たな動き」</p> <p>① 日本の戦略的環境アセスメントの動向—自治体における導入状況を中心に (原科幸彦, 東京工業大学)</p> <p>② 事前環境境性検討制度とSEAの導入 (李宗浩, 清州大学)</p> <p>③ 日本でのEIAの新しい波 (島津康男, 名古屋大学名誉教授)</p> <p>④ 日本の生態系アセスの現状と課題—HSIモデル構築の傾向を例にとって (田中章, 武蔵工業大学)</p> <p>⑤ 不法投棄DXN汚染廃棄物の処理・処分施設建設に向けてのSEA的アプローチ (伊藤勝, 江戸川大学)</p> <p>(2004年11月12日, 韓国済州道で開催)</p>



ワークショップ会場での記念撮影 (2004年11月12日, 韓国済州道)